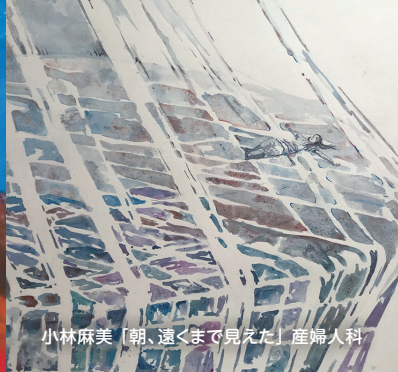


ARTISTS

展示企画 札幌文化芸術交流センター
SCARTSスタジオ1・2

3/24(金) 25(土) 26(日)

スタジオを医療空間と見立て、12人の作家それぞれが、何処に作品を展示するかを想像しながら制作しました。作家名/作品の題名/場所



小林麻美「朝、遠くまで見えた」産婦人科



佐藤綾香「ファーストシューズ」産婦人科



佐藤隆之「猫」待合室

Art is a means for survival.

真っ白な紙にただ1行、そう書かれたオノヨーコさんの2001年のインスタレーション。超高層ビルにジャンボ機が突っ込み、アメリカ中が「報復」を叫んでいたさなか、タイムズ・スクエアに「War is Over! if you want it」という大きな看板を掲げることは、アメリカすべてを敵に回し、殺されるかもという覚悟のうえでの行為でした。その時つくられたのがこの作品です。

いのちをおびやかすのは病気だけではなくありません。ありのままに生きようとするとき、みんなが平穏に生きるのを願うとき、感じたままを、じぶんのコトバで伝えようとするとき、それを奪おうとする力が世界にはあふれています。でも、どんなときも、たとえつばうするときでも、一瞬、いっしゅん、じぶんの息をひきついていくこと、それが自身にも、相手にも、生きのびる力を与えるのです。

ホスピタルアートという言葉が北海道でも聞かれるようになる前から、そのような試みを続け、病院にいる人たちを励ましてきたひとたちの15年間の歩み、夢を、この展示で感じてください。

「行動する市民科学者の会」事務局長 小野有五

アートは

生きる

ための

手段



藤山由香「untitled」入院病棟の談話室



安藤文絵「a life」待合室



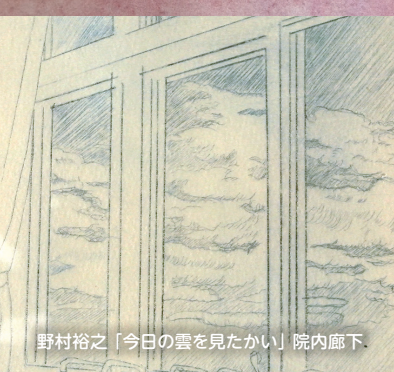
山田恭代美「こもれび」手術待合室



八子直子「風景の庭」エントランスロビー



日野間尋子「ひかり」緩和ケア科



野村裕之「今日の雲を見たかい」院内廊下



瀬川葉子「水から生まれる」内科デイルーム



上嶋秀俊「光の中へ」院内廊下



小川豊「心のひだ」待合室

シンポジウム

テーマ

病院にアートがあるということ

3/26(日) 15:00-17:00
札幌文化芸術交流センターSCARTSスタジオ参加費
無料予約優先
50名お申込みは
こちらです→

病院にアートがあるということ

志田 勇人 医療法人北志会 札幌ライラック病院
理事長

2008年秋から当院で取り組んでいる「びょういんあーとぶろじょくと」は、病院にアートがあることで病院にかかわる多くの方に安らぎや心のゆとりを持って過ごしていただきたいという願いから美術家の日野間尋子さんとのご縁をきっかけに始まりました。この企画を通じて思ったこと、感じたことをお伝えできればと思います。

パソコンでお申込みの方は右のURLからお申し込みください。https://www.hinoma.com/hospitalart/event/

生命体としての病院。ホリスティックなアートの力

森 合音 NPOアーツプロジェクト代表
国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センター
アートディレクター

院内に存在するすべてのアートは、患者様の快復と幸せを祈る医療スタッフの「想い」の結晶です。目に見えない「想い」をどのようにかたちにしてゆか。「現場」の声に耳を澄まし、医療スタッフ、作家、さまざまな分野の専門家と話し合い、アートを媒体にして院内により豊かな医療空間を創出してゆくことを目的としています。